



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

主の公現 A年(2023年1月8日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 60章1—6節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 3章2、3b、5—6節

福音朗読：マタイによる福音書 2章1—12節

主の公現

「公現」という言葉は、ギリシア語で神の^{あらわ}顕れ、^{けんげん}顕現を表すエピファネイアに由来します。古代では立派な人の登場、^{たど}例えば支配者の^{そくい}即位や都市の訪問の際にもこの言葉が使われたそうです。まさに、馬小屋に眠る^{おさなご}幼子イエスこそが、この世に顕れた救い主に他ならないのです。公現祭は4世紀の前半からエジプトで祝われていたと言われていています。ちょうど、^{いきょう}異教の^{さい}祭儀が1月6日前後に執り行われていたことも公現祭が成立した背景にあるだろうと考えられています。主の洗礼、主の降誕、カナの婚礼といった主の^{しゅ}秘義の^{ひぎ}数々を祝う祭りとしてエジプトで形成され、^{けいせい}しだいに東方教会全体に広まっていったようです。4世紀末から5世紀にかけて西方教会にこの習慣は^{でんぱ}伝播していきました。しかし、そこでの公現祭はイエスさまの洗礼に加えて三博士の^{くわ}礼拝(マタイ2章1-12節)を諸国民への救いの^{おとず}訪れとして祝う形式へ変化していったようです。

あじわいのポイント

『イザヤ書』はその成立年代と著者によって、三つの部分に分かれます。通常、1-39章は第一イザヤ、40-55章は第二イザヤ、56-66章は第三イザヤと呼ばれています。今日の^{かしよ}第一朗読は第三イザヤの^{ほしゆう}箇所からです。この時代、バビロン^{たみ}捕囚から戻ってきたイスラエルの民は苦しい生活にあっても^{さいけん}神殿を再建しました。しかし、捕囚の^{きぎん}終わり頃に第二イザヤによって語られた神さまの^き栄光が現れない、^きそれどころか^{うす}飢饉や^{うす}飢餓で苦しめられていました。イスラエルの民の中に神さまへの^{けんげん}信頼が^{くわ}薄らいでいったのです。そんな時、第三イザヤは神さまの^{けんげん}栄光の^{くわ}顕現を語るのです。

今は「闇は地を覆い、暗闇が国々を包んで」いますが(2節)、「あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる」ときが必ずやってきます(同節)。そしてまわりの敵である国々は神さまに気づき「海からの宝」、「国々の富」(5節)を携えてエルサレムへと「押し寄せ」てきます(6節)。その時、エルサレムは「喜びに輝き…心は晴れやかに」なるのです(5節)。こうしてイスラエルの人々ばかりでなく、周辺の異邦人にも「神の栄光が宣べ伝え」られるようになります(6節)。日常の生活の中で希望の光を失い、暗闇の中に沈む現代人に向かってのメッセージとして今日の朗読箇所は読めるでしょう。「主の栄光」が必ず現れるのです。

第二朗読で、パウロは神の内に世の初めから隠されていた「秘められた計画」(神秘)を福音として異邦人に告げ知らせます。その結果、異邦人はキリスト・イエスにおいて「一緒に受け継ぐ者」、「同じ体に属する者」、「同じ約束にあずかる者」(6節)となります。こうして異邦人とユダヤ人との間を隔てる垣根は取り除かれるのです。異邦人はユダヤ人と「一緒に」(6節)新しい在り方へと再創造されていくのです。

福音朗読は内容から三つの部分に分けられるでしょう。第一に1-3節です。時代と場面が設定され、占星術の学者とヘロデ王が登場します。第二に4-8節です。自分の存在を脅かす存在が登場したことに動揺したヘロデ王が、学者たちを集めてメシアがどこに生まれるかを問いただします。第三に9-12節です。占星術の学者たちがどのように幼子を礼拝したかが記述され、最後に夢の中の言葉に従って、ヘロデを避けて彼らは帰っていきます。三つの部分に共通する言葉は「星」(2、7、9節)と「拝む」(2、8、11節)です。このふたつの言葉が今日の福音を味わう際のキーワードとなるでしょう。

罪から救う方の誕生が、異邦人である占星術の学者たちに「星」を通して告げられました。しかし、「星」は「秘められた計画」(エフェ3章3節)を暗示するに過ぎません。彼らは自分たちが身につけた知識と体験に基づいて、「星」に引き寄せられながら出かけていきます。一度「星」を見失いますが、彼らは今度「神の言葉」に出会います(6節)。こうして「神の言葉」に支えられて、幼子のもとにたどり着きます。そして彼らは真の「礼拝」をするのです。